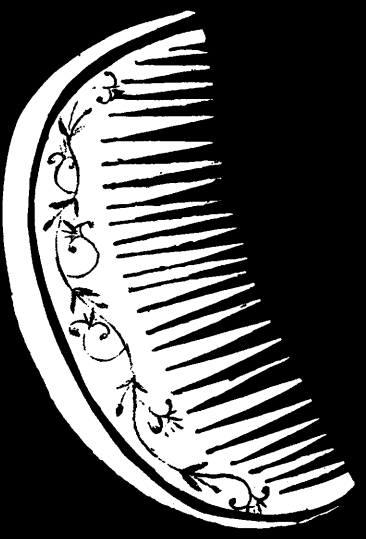


林園

はやし
おへ

原作 芥川龍之介「藪の中」
読みわき 酒井眞智子
挿絵 馬越 智子



この日本語版グレイディッド・リーダーはJGRプロジェクトグループが開発した試作品です。販売を目的としたものではありません。

© 2006 by JGR プロジェクトグループ

京都の北には山があります。

そして、その山のもっと北には

海があります。京都からその海まで

大きい道があります。それは人々が

海で取れた食べ物やめずらしい物を

京都の町へ運ぶ時、

北の町の人が京都の新しいことや、

大切なことを知るために行ったり来たり

する時に通る道です。

がやったのだ。」と言っているのです。

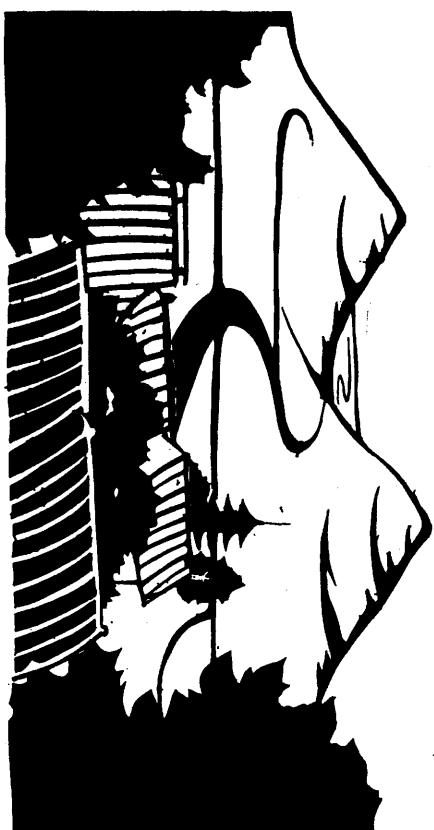
多襄丸が本当のことを言っているとしたら、真砂や金沢武弘はどんな人達
でしようか。嘘をついてなにを隠そうとしたのでしようか。

真砂の話が本当だったら、多襄丸と金沢武弘の話は……。そして金沢武弘
の話が本当だったら……。自分の命よりも大切なこと、守らなければな

らないことは三人にとってそれぞれ何なのでしようか。

暗い林の奥、そして人の心のずつと奥にあったことは……。

おわり



「私は何も分かりません、何も覚えていません。」と言って帰ってしまいました。

番所は静かになりました。事件のすぐ後には、近くの人が侍の死体や多襲丸を見ようと集まって来たり、ひそひそと話したりしてうるさかったのです。でも今はもうそんな人もいなくなつて何もなかったような様子です。

しかし、本当のことはまだ誰にも分かりません。多襲丸、真砂、金沢武弘、この三人の中の誰が本当のことを言っているのでしょうか。一人が本当のことを言つたのなら、他の二人はどうして嘘をつかなければならなかったのでしょうか。それも、「私が殺したのではない。」と嘘をつくのではなくて「私

もちろん京都は国の一番大切な町ですから、この北へ行く道だけではなく、たくさん道の西へ、東へ延びていました。このように大きな町と町を結ぶ道を街道と言います。

ある日、この北の街道の近くの山で働く人が男の死体を見つけました。この人は山の木を切るのが仕事です。建物や橋を作るための木を切るのです。この仕事をする人を木こりと言います。この木こりは死体を見つけると急いで放免に知らせました。放免というのは今の警官と同じような仕事をする人です。放免は死体を調べてみて、この男は誰かに殺されたやうだと思つたので番所に知らせました。番所と言つのは今の警察と同じ様な所です。番所で

は侍が警察の仕事をしています。侍は簡単に言うと言や町の人々のために仕事をします。番所の侍は死んだ男の人が殺されたのかどうか、事故で死んだのかもっと詳しく調べるために、いろいろな人から話を聞くことになりました。話を聞くために番所に呼ばれたのは五人です。死体を見つけた木こり、この男が生きている時に街道で会ったお坊さん、泥棒を捕まえた放免、殺された男の妻の母親、泥棒の多襄丸です。

私は死ぬのだと分かりました。

その時、誰かが私の方へ近づいて来るのが分かりました。誰なのだろうと目を開けてよく見ようとしましたが、影がすっかり私を包んでしまつて暗くて何も見えません。

その誰かが私の胸から刀を取りました。するともう一度口の中が血でいっぱいになりました。それからどんどん暗い所へ落ちていくような感じがして、何も分からなくなりました。

ここで巫女は話し終わつて、ぱつたりと倒れました。しばらくして起き上がりましたが、番所の侍達がいろいろ聞いても

風が吹いて木の枝が揺れています。

私の顔に風が当たって

涼しいのです。だんだん

木の影が大きくなって来て

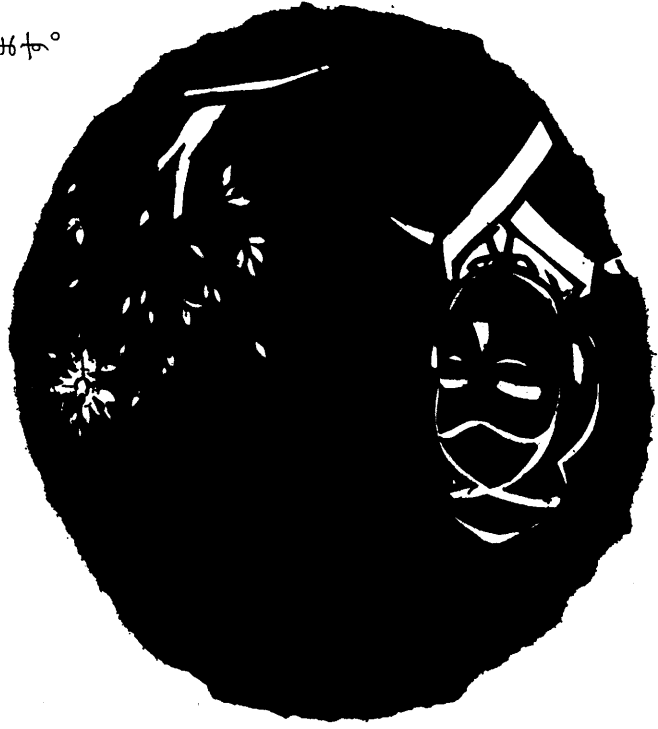
明るい空が少しずつ

暗くなってきました。

もうすぐこの静かさと影が

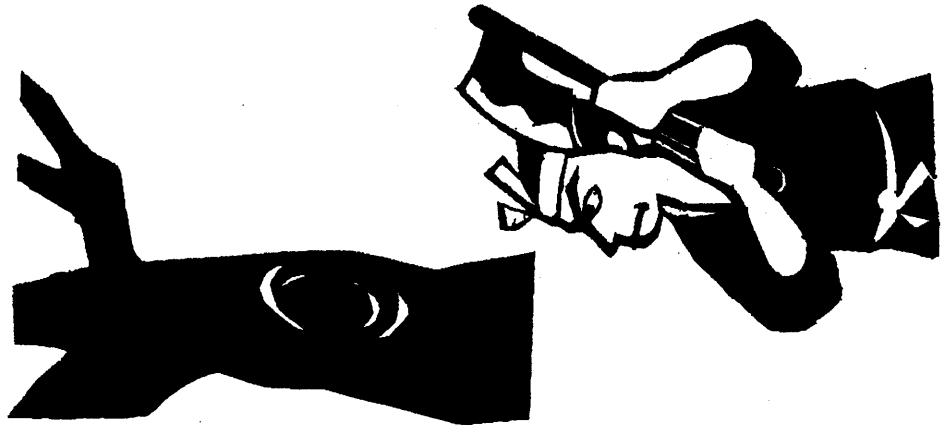
私を全部包んでしまうのだ

と思いました。



死んだ男の人を見つけた木こりの話

「ええつと、それは杉のたくさんある所へ木を切りに行くところでした。



私は木こりですからね、

山で木を切って町や村へ運ぶんです。

今は京都の東の方で大きなお寺を

建てていて、たくさん木が

必要なのだそうですよ。

あ、いいえ、杉林の中ではありません

男の人を見つけた場所は。街道から

山の中へ入っていくと竹の林があるんです。

その林は人がやつと通れるぐらいたくさん竹があつて、それが高く伸びて

いるから屋でも光が入らなくて暗い所なんです。

ら口にながってききました。そつと体を横にして静かにしていました。

だんだん胸の辺りが冷たくなってきました。風の音も木の葉の揺れる音も

聞こえませんが。もう鳥の音も聞こえませんが。

でもとても気持ちがいいのです。

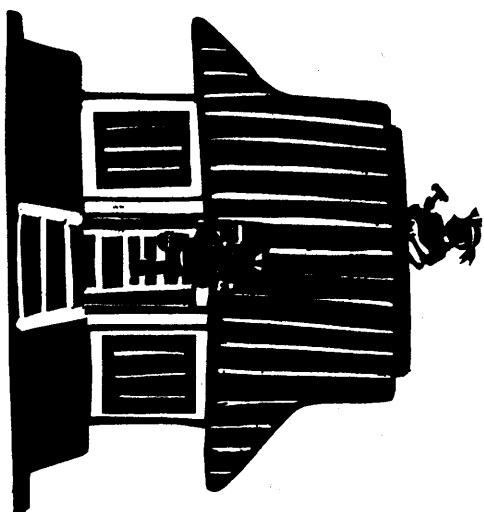
林の上のほうを見ると

青い空が木の枝の間から

見えます。明るく光って

とてもきれいです。

音は何も聞こえないのですが、



それは私の泣き声だったのです。しばらくの間、私は我慢をしないで泣いていました。自分が泣くなんて信じられませんでした。侍は泣いてはいけないのです。でもその時は自然に涙が止まるまで泣きました。しばらくして涙が止まると、何か大変な仕事が終わった時のように疲れてしまいました。紐は男が切って行ってくれたのに、手も足も痛くて立つこともできないぐらいでした。でも手や足の痛みよりも心が痛かったのです。何とか立って見ると目の前に真砂が落としていった小さい刀がありました。それを手に取って、残っている力を全部使って自分の胸を刺しました。でも痛くなかったんです、痛さ何も感じる事ができませんでしたけれど、ゆっくり熱いものが喉か

私はいつも林の中で木を切っているのに、なんだか怖くなるぐらい暗くて気持ちが悪い所でなので、急いで通り過ぎるようにしているんです。その竹の林を通り過ぎると少しだけ明るい所に出るんです。そこは低い木がいっぱいある所で、お日さまの光が入ってきますから、ちよつとほつとします。私が木を切る所は、もう少し先です。杉の林があつてその中にあるんです。だけど、昨日は低い木のある明るい所で男の人を見たんですよ。初めは木の下で寝ているのかなと思つたんです。だけど近づいて見ると古くなった魚のような嫌な臭いがして、大きな蠅が周りを飛んでいるので『変だな。』と思つたとたんに気が付きました。

『あつ、この男の人は死んでいるんだ。』それで

急に足がガクガク震えてしまいました。

でも私は死んだ人を見るのは

初めてではありません。木こりは

高い木に登って切ることもあります

から、落ちて大怪我をしたり死んで

しまったりすることもあるんです。

ですから段々に落ちて着いて男の人

を見ることも出来ました。土を向いて



男は『これはだめだ、急いで逃げよう。ここにいると今度は俺が危ない。

あの女、誰かに俺のことを言うだろう。』と言って、男は

私の紐を切ってくれた後で、弓矢を取って林のむこう

走って消えました。

男がいなくなると周りは急に静かになりました。

風の音と鳥の鳴く声だけが聞こえます。それから

どこかで誰かが泣いているのに気が付きました。

声はどこから聞こえるのだろうと

周りを見ましたが、誰もいません。



ところが、男は真砂をとて乱暴に蹴つて倒しました。そして私に言いました。

『どうするこの女、このひどい女、お前の妻だが殺してやろうか。それとも助けてやりたいか。どうしたいか言ってみろ。』そう言いながら私の口から木の葉を出してくれたのです。この言葉を聞いて、私はこの男にもいいところがある、今までのことを忘れてやろうと思いました。私たちは真砂に對して同じ気持ちになったのだと思いました。

しかし気が付くと、真砂は何か叫びながら林のむこうへ逃げていったのです。驚くほど速く走って行ってしまったのです。

寝ているようでした。

男の人は烏帽子をかぶって、空色の着物とそれから袴をはいていました。烏帽子は侍がかぶる物ですから、それでこの男の人は侍なんだとわかりました。胸の所に刀のような物で深く切られたような傷がありました。そこからたくさんの血が出たらしく、空色の着物が赤黒くなっていました。お侍の周りに落ちていた木の葉にも血がついていました。」

「いいえ、刀は見ませんでした。お侍の倒れていた所に大きい杉の木があるんですが、その木の下に紐が落ちていました。

そうだ、思い出した、そのお侍からちよつと離れた所に櫛が落ちていた

んですよ。一本だけです。女の人が使う物だと思ひます。何でもんな所に女の人の櫛が落ちてゐるんだらうと思つたんです。

変でしよう、だつてあんな林の奥に

女の人は行きませんか。」

「他に気が付いたことですか、

そうですね・・・えーつと、

お侍が寝ているように倒れてゐたんですけど、

それなのに周りの草や木の葉が足で蹴られたり、踏まれたり、倒されたりしてゐたんですよ。それを見ると、お侍は誰かと喧嘩をしたのが動き回つた



あの人が生きてゐると私は安心してあなたと行くことができません。どうぞお願いいたします、殺してください。』

『あの人を殺してください。』こんな恐ろしい言葉が妻の口から出ることを

信じられる人がいるでしょうか。この言葉が強い強い風になつて私を暗い

所へ吹き飛ばしました。あの時、私はもう死んだのかもしません。」

「けれども、あの男も真砂の言葉にひどく驚いて、何も言えなくなつて

しまつたようです。しばらく黙つて立っていました。真砂はもう一度『殺し

て。』と叫びながら男の手を取りました。この時、私は殺されるのだと思ひ

ました。

私はもう死の世界にいるのです。それでも

この真砂の言葉を思い出すと、

激しく嫌いなのだと感じます。妻は

うれしそうな顔で男の手を取って、

林の中から出て行くとしたのですが、

急に何か恐ろしくなった様子で男の顔を見ました。

『どうしたんだ。』と男が聞きました。

妻は私の方を指で指して

『あの人を殺してください、



りしたんじゃないかと思えます。切られて死んだのなら、苦しんでいたんでしょうが・・・静かに寝ているようだったんですよ。」

「あつ、もう終わりなんですか、それじゃあ帰ってもいいんですね。ありがとございます。私がこんなことを言う必要もないことでしょうが、あのお侍はまだ若いのに死んでしまつてかわいそうです。

目が開いたら、そのきれいな目に青い空が映つて気持ちよそそに見たのではないのでしょうか。

もし誰かに殺されたのなら、早く殺した悪い人を見つけて下さい。」

「私ですが、いいえ、まだ仕事が終わらないので家には帰れません。この

仕事が終わったから今度は南の方の山で木を切るんです。やはりそちらの大きな町でお寺を建てるそうで……。木が必要な所はどこでも行きます。それが木こりの仕事ですからね。それでは失礼いたします。」

木こりが帰った後、番所にはお坊さんが呼ばれました。北の街道を京都に向かつて歩いていた時に、侍を見たといふのです。お坊さんはお寺の人です。お寺で人のこと、木や花や動物のこと、世の中のこと、神様のことを考えたり、勉強したりします。それからもうと世の中のことを知るために旅をしたりします。

いんだ、俺は。始めて見た時、お前が好きになつたんだ。本当は乱暴なことをしたくはなかつたんだ。俺はもつと優しい男なんだ。』

こんな嘘をついたのです。そしてこれを聞いて真砂はとても嬉しそうにあの男の顔を見ました。

私は驚きました。真砂のあんなに嬉しそうなお顔を見たことがありませんでした。私は信じられませんでした。さらに真砂は木に縛られてゐる私の前で言いました。

『どうぞ、連れて行ってください。どこへでも一緒にまゐります。お願いいたします。』

信じ始めているのです。

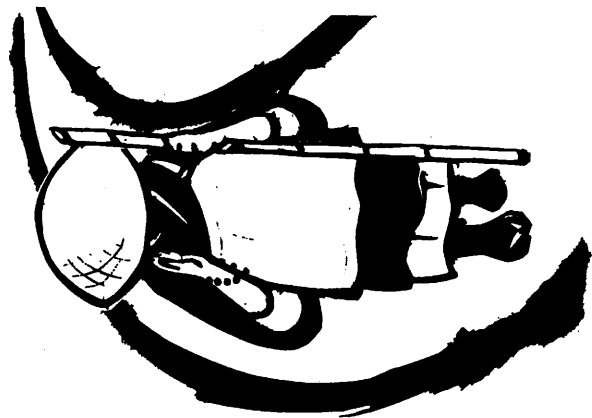
『だめだ、真砂、だめだ。嘘なんだからそんな話は。』

でも、真砂には私の心の声は聞こえませんでした。真砂は私の方を見ようとしません。男は私にも聞こえるように大きな声で言いました。

『一度だけでも妻が他の男のものになったら、普通の男は誰でも妻が嫌いになる。その上、自分の見ている前でそんなことになったら、妻を殺したくなるかもしれない。お前の夫は今どんな気持ちだろう。多分、嫌いになっただろうな。お前だってもう恥ずかしくて一緒にいることはできないだろう。お前は俺と一緒にどこかへ行つた方がいいのではないか。夫婦になつてもい

山道を歩いていたお坊さんの話

「あのお侍、おまには二、三日前に会つたばかりでございます。亡くなられたんですか、とても信じられないことです。殺されたかもしれないなんて……。おかわいそうなことでございます。」



どうぞ静かな気持ちであちらの世界に行くことができそうですよにお祈り申

上げます。」

「はい、お侍さまに会ったのは一昨日のお昼ごろでした。会った所は

京都の町から少し離れた北の街道です。私は北の山の方から町へ向かって歩

いていました。道のそばには野菜や花の畑がありました。お二人は京都のほ

うから山へ向かっていらつしやいました。」

「はいそうです。お侍さまはお一人ではなくて馬に乗った女の人とご

一緒に歩いていらつしやいました。」

「お二人の様子でございませうか。お二人を見たのは本当に少しの間だけで

嘘だ。真砂、この男がどんなに優しいうことを言っても嘘なんだからね。』

できる限り大きな目を開いて、真砂の顔を見ました。

私の気持ちたちが伝わるように

一生懸命見ました。

しかし真砂は下を向いて

私の方を見ません。

それどころかあの男の話を

じっと聞いているようです。

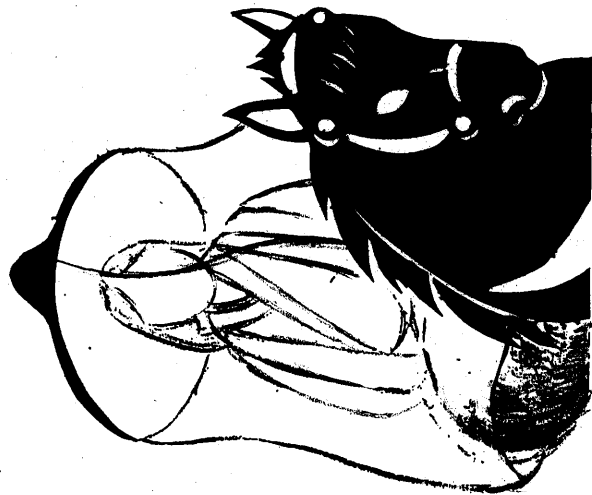
そして、だんだん男の話を



とても残念で、苦しくて、目を開けているのもやつとでした。でも真砂が無事ならいい、生きていればいいと思っていました。男が行ってしまうと、また二人は元のように夫婦なのだから。そう思っていたのに、あの男は乱暴なことをした後で、下を向いて黙っている妻に近づいていろいろ話しかけるのです。優しくそんな声で何か言っていてまた妻をだまそうとしているようでした。私は口の中に木の葉をいっぱいに入れられていましたから、声を出すことはできませんでした。それでも、一生懸命に妻の方を見て目で知らせようと思いました。

『だめだ、こんな男の話は信じてはいけません。この男の言うことは全部』

すからあまりよく覚えておりませんが、できるだけ思い出してお話いたします。女の人は旅行をする時の大きな帽子のような物をかぶっていました。



そして帽子の上のところから薄い布が掛かっていました。その布があるので

女の人の顔は見えませんでした。」

「着ている物ですが、そうでございませうね・・・きれいな薄い緑色や黄色
だつたと思います。下のほうに赤い色と紫色もあつたような気がします。

申し訳ありません、私は今、旅をしながら立派なお坊さんになる勉強を

しているところなのです。いつもお寺のことやえらいお坊さんのことばかり
考えて歩いているので、他のことに注意ができないのでございませう。」

「馬ですが、馬の毛の色は少し赤い茶色でした。大きさは背中から足まで
が一メートルと三十センチぐらいだつたと思ひます。大人しそうな馬でした
よ。」



けれど私は簡単にあの男の嘘にだまされた。林の中に古い墓があるといふ
話にすっかり興味を持って、真砂を取られてしまったのです。私は杉の木
に縛られてしまつて何もできないで、ただ見てゐるだけでした。

みこ し せかい よ もむらい はなし
巫女が死の世界から呼んだ侍の話

みこ
巫女というのは特別な力を持っている女の人です。死の世界から死んだ
ひと こころ よ く
人の心と呼んで来るのです。そしてその心を自分の体の中に入れて話を
させることができるのです。

い はな
生きていたら話したかったこと、誰かに知らせたいことを巫女の声を使っ
て話すのです。それでこの侍の話は、みこ し せかい よ もむらい はなし
巫女が死の世界から侍を呼んで
みこ こえ はな
巫女の声で話したことなのです。

「あの嘘つきの男が私の妻、真砂を乱暴に取ってしまったのです。残念だ

かたな
「刀ですか、お侍さまは刀を腰の左側に付けていました。



弓と矢も背中にかけていました。矢は・・・、そうですね、二十本くらいあったと思います。」

「着物ですが、確か空色だったと思います。頭には何か黒い帽子をかぶっていました。烏帽子というのですか、そうですか、名前は知りませんでした。お顔は若いきれいな、でも弱々しい感じではなかったと思います。そのぐらいしか覚えておりません。何しろほんのちよつとの間だけでしたから。申し訳ございませせん、あまりお役に立たなくて・・・。」

お坊さんの話はこれだけです。

番所を出てからお坊さんは『あんなに若くて立派なお侍、まが亡くなつ

「北の方に巫女がいる。

その巫女は死んだ人の心を死の世界から呼んで来て、巫女の体の中に

その心を入れることができるそうだ。

そうして死んだ人が生きている時に

話しかかったこと、思っていたことを

自分の声を使って伝えることができるんだそうだ。」

他の侍達もそれを聞いて、「一度その巫女を呼んで死んだ男の話を聞いてみたらどうだろう」と賛成しました。



夫が『そばに来るな』と言っているのでしょうか。

『乱暴なあゝの男のものになつたのだから、もう真砂は私の妻ではない。』
そう言いたいのでしょうか。汚されたまま私は生きていかなければならない
のでしょうか。どうやつて生きていけばいいのでしょうか。』

番所の侍たちは困つてしまいました。多襄丸は「侍を殺したのは俺だ。」
と言っていますし、侍の妻も「夫を殺したのは私です。」と言っているの
です。しばらく迷つてどうすればいいか話し合つたり、他の番所の侍達の意
見を聞いたりしていました。

すると、一人の侍が言いました。

てしまうなんて、本当に人の命は朝開いて昼には落ちてしまう花のようなも
のなのだなあ。生きている時間と夢の時間は同じようなものなのかもしれな
い。でもそれを悲しいと思つるのはまだまだお坊さんの勉強が足りないからな
のだらう。』などと独りで言いながら山の方へ歩いて行きました。

二番目に番所に呼ばれたのは放免です。初めにも説明しましたが、放免と
いうのは今の警官のような仕事をする人です。

この放免は泥棒を捕まえました。泥棒の名前は多襄丸といいます。多襄丸は、
京都の北山で人の物を盗んだり、刀を振り回してたくさんの人に怪我をさせ
たり、家に火をつけたり、人を殺したりしているので怖がられていました。

ですから捕まったと聞いた人々は驚き、そして喜びました。

多襄丸を捕まえた放免の話

「多襄丸を捕まえることができたのは運がよかったですよ。あの男は怪我をしていましたからね、馬から落ちたように動けなかったんですよ。骨でも折れているんですよ。」

あの泥棒は、北の街道を旅する人から荷物を取っていたんですよ。あそこは京都から北山の向こうの海の町まで続いている道ですから、大切な物が運ばれます。多襄丸は力も強く乱暴ですから、人の荷物を取るのには簡単でした。

ら取って、口の中の木の葉を出してさし上げました。それで少しでも夫が苦しくなくなるような気がしたのです。

今度は私が自分で死ぬ番でした。でも、もう力がなくなつて、死ぬことができないかったです。喉を刺そうと思つたのですが、刀を持つ力もないのです。立つのもやつとでした。林の中をふらふらしながら歩きだしました。足が重くて、少しでも高くなつた所には上がれませんでした。気持ちも弱くなつてしまつたのです。池があつたのですが、水の中に入る勇氣もありませんでした。

それでこのようにまだ生きています。

夫の胸のあたりを着物の上から力いっぱい刺しました。刀がどこを刺したのか、夫がどうなったのか分からないうちに、気が遠くなつてしまいました。気が付くと、夫は息をしていませんでした。死んだのです。胸の所には私の小さい刀が刺さつていました。夫の青白い顔に西日が当たつていました。風が吹くと木の葉の影がゆれて、なんだか夫は生きているように見ええました。

殺してしまったのに、私は夫のきれいな顔を見てほつとしたのです。変な気持ちです。でも急に悲しくなりました。涙が出てきました。声を出さないうように泣きました。泣きながら体を縛っている紐を切りました。刀を胸か

その上、頭がよくて走るのが
速かつたのでなかなか捕まえられ
なかつたんです。昨日は、近くの村に
住んでいる人が誰か怪我をして
動けないでいるから見てくれと
知らせて来たんです。それで、行って
見ると村の近くの橋の上で怪我をして
苦しんでいる男がいたんです。顔を
見て驚きました。



捕まえようと思つてもなかなか捕まえることが
できなかった多量丸だったんです。ずいぶん

汚れた着物を着ていましたよ。

紺色だったと思います。

刀を持っていました。古いけれど

よく切れそうな刀でしたよ。

それから弓と矢も持っていたんです。

弓には革が巻いてあって、りっぱな

物でした。矢は十七本ありました。



それで私の小さい刀を使うことにしました。

胸の所から小さい刀を出して、

『ではあなた様の命を取ります。

そしてその後で私も死にます。

待つていてください。一緒に

死の世界へ参りましょう。』

と申しました。夫は何も言えませんでした、

私には分かりました。『早く殺せ』

そう言いたかったのです。



されるところを見てしまいました。こんな恥ずかしいところを見られたので
す、どうぞあなた様も死んでください。武弘様が生きていては、私は安心して
死ぬことができません。お願いでございます。どうぞ死んでください。』

私が一生懸命頼んでも夫の目はやはり冷たいままです。また先ほどのよ
うに、冷たい氷の光が胸を刺して痛むのです。本当に血が流れているので
はないかと思うぐらい痛かったのです。夫に死んでもらわなければ、この痛
さは無くならない。そう思つて夫の刀を探しました。しかし刀はありません
でした。弓矢もありませんでした。

多分あの男が持つて行つてしまつたのだでしょう。間違ひありません。

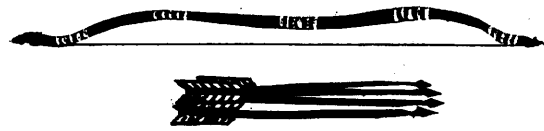
きれいな鳥の羽がついていました。

これは多襄丸の物ではない

と思ひましたよ。きつと誰かから

盗んだに違ひないですよ。本当に悪い男だ。」

「はい、馬もいましたよ。桶のそばで草を食べていました。色は少し赤い
来色でした。その馬から落ちたのかな。たぶんその馬も多襄丸が誰かから盗ん
だ物なんでしょう。盗んだ馬から落ちて大怪我をして捕まつてしまつたんで、
はつ、はつ、はつ、悪いことをすればいつか悪い結果が返ってくるんでしょ
うね。」



「お侍さま、京都には他にもたくさん泥棒がいます。でも多襄丸はそ
 の中でも一番悪い泥棒だと言ってもいいんです。
 この男は女の人に乱暴するのが好きなんです。」

去年の秋でしたが、
 京都のお寺に來た若い母親と
 その赤ん坊が殺されたことが
 あったんです。多襄丸が
 その場所から逃げて行くのを
 見た人がいます。



そのまま、どのぐらい時間がたったのか分かりませんが、気が付くと、青い
 空が林の上に明るく見えました。小鳥がきれいな声で鳴いていました。
 すぐにはどこにいるのか分かりませんでした。何が起こったのか思い出して、
 急いであの乱暴な男を探したのですが、どこにもいません。でも夫はまだ杉
 の木に縛られたままでした。さっきと同じように冷たい目で私を見ているの
 でございませす。その目が私の悲しさ、恥ずかしさ、悔しさをもう一度感じさせ
 せました。私は武弘様に大声でお願いしました。
 『もう武弘様とは一緒にいられません。このようなひどいことになってし
 まって、私には死ぬことしかできません。武弘様は私がああ乱暴な男に汚

男^{おとこ}のものになってしまった。もう汚^{きた}れてしまったんだ。

私^{わたし}のそばに来るな。』

夫^{おつと}の目はそう言^いっていました。

夫^{おつと}はもう私^{わたし}のことを

かわいそうだと思^{おも}っていません。

悲^{かな}しんでもいません。

氷^{こおり}のよう^{つめ}に冷^{ひや}たい光^{ひかり}が

私^{わたし}の胸^{むね}を深^{あふ}く刺^さして、その激^{はげ}しい痛^{いた}さで死^しんでしまったように何^{なに}も分^わからな
くなりました。



母親^{ははおや}は乱暴^{らんぼう}されても赤ん坊^{あか ぼう}を守ろうとして、刀^{なた}で切^きられたようです。胸^{むね}に
小^{ちい}さな赤ん坊^{あか ぼう}を抱^だいて死^しんでいる様^{よう}子は、本^{ほん}当^{とう}にかわいそうでした。いろい
ろな事^じ件^{けん}を見^みている私^{わたし}でも涙^{なみだ}が出^でてしま^いいましたよ。昨^{きのう}日^ふ、仲^{なか}間^まの放^{ほう}免^{めん}が
お侍^{さむらい}さん^しの死^しんでいるのを見^みたと言^いっていました。多^た囊^{じようまる}丸^{まる}が持^もっていたの
はそのお侍^{さむらい}さん^{ゆみ}の弓^やと矢^やではな^いいのでしょうか。前^{まえ}の日^ひには女^{おんな}の人^{ひと}と一^{いっ}緒^{しょ}
だつたそうですね。多^た囊^{じようまる}丸^{まる}がや^やつたのだつたら、敵^{あひ}しく調^{しら}べて女^{おんな}の人^{ひと}を探^{さが}し
てください。私^{わたし}も急^{いそ}いで山^{やま}の方^{ほう}く戻^{もど}つて探^{たか}してみましよう。」

放^{ほう}免^{めん}が帰^{かえ}つた後^{あと}、番^{ばん}所^{しょ}に呼^よばれたのは中^{ちゆう}年^{ねん}の女^{おんな}の人^{ひと}でした。こ^この^{この}人^{ひと}は死^しん
だ侍^{さむらい}と一^{いっ}緒^{しょ}に歩^{ある}いていた女^{おんな}の人^{ひと}の母^{はは}親^{おや}です。

番所の侍は持ち物に書いてあつた侍の名前から、知っている人を探し
たところ、侍の妻の母親が京都に住んでいることが分かったので。

侍と歩いていた女の母親の話

「それでございませう。あの方は武弘様でございませう。去年私の娘と結婚し
た武弘様です。どうして・・・どうしてこんなことになつたのでしょうか。娘
は、娘の方はどうなつたのでしょうか。死んだのでは・・・」
娘の夫が亡くなつたので、すぐには落ち着いて話すことができま
せんでした。しばらくして番所の侍の質問に答えて話し始めました。

一生懸命に止めさせようと戦つたのですが無理でした、私の力では、男
の大きな手の中の小さな虫のようなものでした。虫を動けなくするのは本当
に簡単だつたんですよ。男はにやにや笑ひながら夫を見ました。『どうだ、
悔しいか、残念だらうな』と言つてゐるようでした。

夫は口の中に木の葉を入られていて、木に縛られていたのですから、何
も言えませう、体を動かすこともできませんでした。私は夫のそばに走
つていったのですが、乱暴な男は私を足で蹴つたので転んでしまいました。
とても痛くて涙が出てきましたから、思わず夫の顔を見上げました。けれ
どその時夫の目は冷たい氷のように光つたのです。『真砂、お前はその汚い

で会わなければ……。」

そう言つて金沢武弘の妻は泣き出しました。しばらく泣くのを黙つて聞いていた後、番所の侍はどうして夫を殺したのか話すように言いました。

「男は古くて汚れた着物を着ていましたが、前には侍だつたと言つていました。たぶんそれは嘘だらうと思います。今は分かります。

その時は夫と一緒にいたから、あの男に疑いを感じませんでした。けれども悔しいことですが、あの男はとても頭がいいのです。私たちは簡単に男の嘘の話を信じてしまつたのですから。

乱暴な力と、嘘の話で男は私を夫から取つてしまつたのです。

「はい、あの方は金沢武弘様でございます。いいえ、京都の方ではございません。北山の向こうの若狭の国の侍でございます。

年は二十六歳でございます。

金沢家は若狭ではとても古い立派な家で、お父様は国の大切な仕事をなさつていらつしやいます。

武弘様も優しく、真面目な方です。娘もそう言っております。お友達もたくさんいて誰も悪く言う人はいません。刀も上手に使える方でした。でも刀を使つて喧嘩をしたり、人と競争したりすることが嫌いなようでした。それで、刀の試合の時など気持ちが優し過ぎてどうしても勝つことができな

「のだそうです。娘はいつも残念だと言っていました。」

「娘でございませう。娘は真砂と言います。歳は十九歳でございませう。」

小さい時から元気で気が強く、主人も真砂の兄達も『真砂は男の子だったら

よかつたのに』と言っていました。

武弘様との結婚の時も、他の娘さんたちは御両親が決めた方と何も文句を

言わずにお嫁に行きますのに、真砂は自分で決めたのですよ。お友達のお兄様

の出られた馬の競走会で会ったのだそうです。

娘はその競走会から帰って、武弘様と結婚したいと申したのです。私た

ちは驚いたのですが、どうしたことが、武弘様も面白く娘さんと気に入

「どちらの言っていることが本当なのだらう。」と悩んでしまいました。「と

にかく、その女を二に呼んで話を聞いてみよう。」という事になり、金沢

武弘の妻が番所に呼ばれました。

清水寺にいた金沢武弘の妻の話

「わたしは夫を殺してしまいました。夫の名前は金沢武弘と申します。若

狭の侍でございませう。どうして殺したのかお話しします。その後で私も死

にます。あの汚くて粗暴な男が悪いのです。あの男に会って、あの男が嘘

をついたから私は夫を殺すことになってしまったのです。あんな男に街道

しばらくしてその妻が見つかつたと言ひ知らせが来ました。

清水寺で肩を落として座つていたのだそうです。

お寺の人が話し掛けると急に泣き出して、

「夫を殺してしまつた、私も死にたい。」

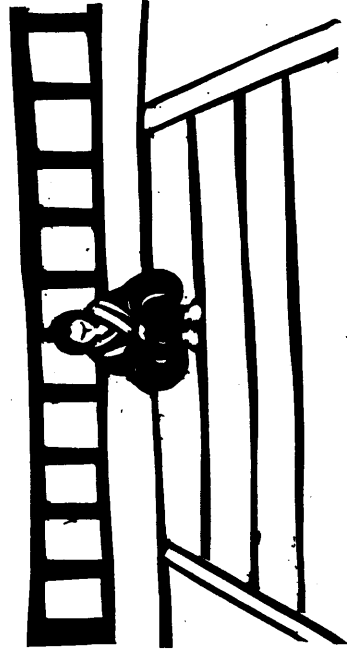
と言つてゐるらしいのです。

驚いた寺の人が番所に知らせて来たのです。

侍たちは、金沢武弘の妻が無事に見つかつて

よかつたと思つたのに、今度はその妻が

夫を殺してしまつたと言つてゐるのですから



てくださつて、とうとう結婚することになつたのが去年でございます。

本当に幸せそうな一人でしたのに……。」

母親はまた思い出して泣き出したため、話すことができなくなりました。

「すみません。娘のことが心配でございます。はい、顔は卵のような形で小さいです。」

番所の侍は林の中に落ちていた櫛を母親に見せました。

「ああ、それは真砂の櫛です。どこで……。結婚する時に私があげた

物です。一昨日京都から若狭に帰る時、付けておりました。

一人は若狭に住んでゐるのですが、武弘様が仕事のためにしばらく京都に

来ていらっしやいました。娘も一緒でした。仕事が終わって若狭に帰るとい
ふでございしました。

武弘様が亡くなってしまうって、真砂は生きているのでしょうか。どうぞ娘
を探してください。何かあっても娘が生きて私達の所へ帰って来ることを
願っております。」

真砂の母が泣きながら帰って行くと、番所には泥棒の多襄丸が連れてこ
られました。大怪我をしていて歩くのも大変そうです。

だけど・・・もう話す必要はないな。」

「万と言矢はどうしたのかって聞くのか。それは馬に乗って逃げようとし
る前に捨てたんだ。

これで全部だ、俺の話は。嘘はない。俺はいつかは捕まって、首を紐で縛
られて木の枝から下げられるんだ。嘘をついても仕方がない。怖いものも何も
ない。」

多襄丸が侍を殺した。番所の侍はこれでこの殺人事件は終わったのだ
と思いました。

しかし金沢武弘の妻はどうなったのでしょうか。

そうか、女は誰かに助けてもらおうと思って、今ごろ町の方へ行ったのかもしれない。このままここにいたら放免や町の男達が俺を捕まえようとして来るかもしれないぞ。危ない、危ない。

そう思ってすぐに自分の刀と

侍の弓矢と刀を取って

街道の方へ走って行った。

ここから北の山の方へ逃げようとするぞ、

あの女の馬がのんびりと道の草を食べていたんだ。

急いでこの馬に乗って逃げようと思った。



多襄丸の話

「痛い、痛い。俺が馬から落ちるなんて何ということだ。こんなばか나ことになるなんて。あの馬は俺を乗せるのがどうしても嫌だと言っているようにひどく騒いだんだ。だけど、今まではどんな馬でも俺の言うことを聞いて、大人しくさせる自信があつた。それなのに気が付いたら落とされていたんだ。

いたたたた……。あの馬は乗る者を選んでるみたいだ。」

「そうだよ、あの侍を殺したのは俺だ。本当だ。でも女は知らない。どこかへ行ってしまった。殺してはいない。

どうして侍を殺したか、ようし、聞きたいのなら話してやる。

一昨日の朝、天気がいし、涼しい風が吹いていて、俺はなんだかひどく気分がよかった。そんな時に、あの二人に会ったんだ。」

「どこでかって。京都の北へ行く街道だ。女は旅の笠をかぶっていて、その笠の上から薄い布を掛けていたから、顔が全然見えなかった。

一人が俺の方に近づいた時、急に風が吹いてその薄い布がふわふわと上がったんだ。それでちよつとだけ女顔が見えたんだ。すぐに風が止ったからあつと言つ間に見えなくなつてしまった。あの風が吹かなかつたら女顔を見ることもなかった。

だけどその顔は女の神様のようだった。女神様だぞ。女神様は侍でも、

とこが、さあ一緒に行こうとすると、女がいないんだ。周りを見てもどこにも

いないんだ。杉の木反対側を見ても

竹の林の暗い方を見てもいない。

走る音でも聞こえるかと思つて

静かにしてみたが何も聞こえない。

侍の喉がこころ言っている。

それだけが聞こえる。その音も段々小さ

くなつていく。もうすぐ死ぬのだから。



もやった。もちろん一回も負けたことはない。

その試合のなかで、二十回以上俺の刀と

正面でぶつかり合ったのは

この侍だけだった。この侍は

刀の使い方がすごく上手だったんだ。

強かったんだ。

俺だって強い侍から奥さんを

取ったんだから、気分がよかった。

嬉しかった。



俺のような人間でも同じように優しくしてくれる母親なんだ。

母親のように温かく抱いて包んでくれるんだ。

女神様は一人の男のものじゃない。

俺のものでもあるんだ。そんな女は

なかなか見つからない。

やっと会うことができたんだ。

だから俺のものにすると決めた。

男の方はどうでもいい。邪魔なら殺してしまってもいい。殺すことは簡単

だ。刀で命を取る、それが殺すことだ。



とこるが、侍や金持ちは金の力や嘘の言葉で人を殺す。汚い、汚い。金をたくさん持っていて嘘をつくのが上手な者が、町のなかで一番強い者になるんだ。血も流れないし、命も取れない。しかし、そうやって金や嘘の言葉で殺された者はずっと苦しむんだ。体が死ぬまで、恥ずかしさや残念な気持ち

ちが長い間、心を苦しめるんだ。

刀で命を取るとどちらが悪いか、俺にはよく分からない。」
多襄丸は番所の侍にそう言って答えを聞いていたようでしたが、侍たちは早く話を進めるように言いました。

「分かった、分かった。どうして殺すことになったか、初めから順番に話

俺は紐を切って、刀を渡そうとした。すぐに侍は立って口の中の木の葉を取り出してから大きく息をして、刀をつかんだ。
試合の結果は言う必要もないだろう。

侍は刀を上手に使った。二十三回、俺の刀と侍の刀が正面でぶつかり合った。そして

俺の刀が侍の胸を深く刺した。

二十三回、これは大事な点だ。

俺は今までに刀の試合を何百回



その熱い光に刺されて死んでもいいと感じたんだ。他の女だったら足で蹴
ってやっただろう。そして逃げてしまえば、侍と女がどうなっても俺には
関係ないから男を殺さなかったし、このように捕まったりもしなかった。
だけどあの女の目の熱い光を見た時、すぐに男を殺そうと思った。けれど
紐で縛ったまま男を殺すのはよくない。紐を切って刀で試合をしよう。俺が
勝つのは分かっているけれど・・・男らしいやり方で殺そう。そうだろう、
ここにいるお侍さんもそう思うだろう。

それで侍に言った。

『どちらが生きるか死ぬか刀で決めよう』

していくから待て待て。

一昨日の朝は女だけ俺のものにすればいい、男は殺すことはないと思っ
ていた。けれど、あの街道では人が通るからだめだ。ずっと遠い山の中へ二人
を連れて行って、そこで女を取ってしまおうと思った。

どうやって二人を山の中へ連れて行こうか。俺は考えた。泥棒だつて頭を
使わないとすぐに捕まってしまうからな。

しばらく考えて、俺は二人に近づいた。そして、できるだけ丁寧に話しか
けたんだ。『あの、お侍さん、私は山で仕事をしている者なんですが、先日
あの山のむこうで古い墓のような物を見つけたんですよ。どのぐらい古い物

なか、誰の物なのか知りたくなりました。実は私は昔は侍だったので、そのころには家に古い刀や鏡があったので、興味を持って勉強したんですよ。今はこんな山の中でさびしい生活をしなければならなかったの

ですがね。』とね。

一人は初めは黙って歩いていったんだけど、

俺が侍だったと聞くと、話に関心を

持ち始めたんだ。

『私は墓の周りをちよつと調べてみたんです。

そうすると、土のなかから古い刀や



苦しくて恥ずかしいことではあります。どちらかが死んで、残った方と夫婦にならなければなりません。どうぞお二人で決めてください。』
俺は驚いた。だけどこの女と夫婦になれるんだ。よし侍を殺してやるう。自分の妻がこんなことを言うなんて、侍はどう思っただろう。とにかくその時は、速くこの男を殺してしまおうと思った。
こんなことを言つと『やつぱり多摩丸はひどい奴だ。』と思うかもしれないが、あの時あの女の目を見た者はきつと誰でも俺と同じように思っただけだ。女の目は火が燃えているように熱く光ったんだ。その光は俺の胸を刺したのかと思っただぐらい熱くなつて痛かつたんだ。この女を妻にできるのなら、

「俺が走り出そうとすると

急に女が俺の手を取って言ったんだ。

『待ってください。私をここに

置いて行かないで下さい。

お願いします。あなた様か主人か

どちらかここで死んでください。

私が一人の男のものになったままでは

生きていくことはできません。

このまま生きていることは死ぬより



お金のような丸い物がたくさん出てきたんですよ。

これはゆっくり調べた方がいいと思つて

土や木の葉を掛けて置いてきました。

お侍さん、もし興味があまりなら見て

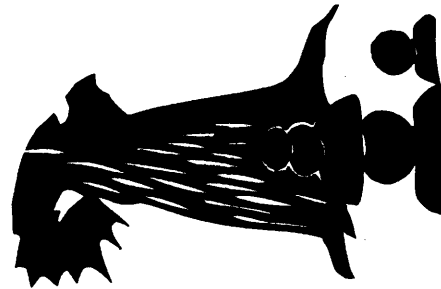
いただけませんか。勉強した

といつても少しだけだし、

出てきた物がたくさんあつて一人では

大変なんですよ。見ていただいて、お侍さんが好きな物があつたら、

持つて行つてもいいですね。全然ためなら私も諦めますがね。』と。



俺がそう言つて、あの侍はとても興味を持ったようで、一緒に行つてみようと言つたんだ。ほい、人間なんて皆同じぞ。金になることが嫌ひじやないんだ。きつと心の中で汚い男をだまして、価値のありそうな物をいただいで、京都で高く売つてやろうと考へたんだ。

そうなれば後は簡単。俺は侍と女神様と一緒に山の中へ連れて行つた。山道の途中まで女は馬に乗つて行つたんだ。

だけど、竹の林の所まで来るともう馬は進めない。竹がたくさんあつて道もないんだ。それに屋でも暗いから女は気持ちが悪くなつたんだろつ。

『私はここで待ちます。どうぞお二人で行つてください。』

の葉が口の中に入っているから何も言えない。殺さないで侍の妻を取るんだとができたんだ。これで俺の欲しいものは手に入れた。もうこの二人に用はない。すぐに林の外へ逃げようと思つたんだよ。」

こゝまで多襄丸はとても速く話していましたが、急にゆつくり真面目な顔になつて、黙つてしまいました。その時のことを

ちよつと思ひ出して考へ込んでゐるようです。

「ううん、俺はなんだか女がよく

わからなくなつてしまつた。」と言つて

また、多襄丸は話し始めました。



何回も、何回も俺を刺そうとするんだ。

今まで女が俺に向かってくることもなかった。

どうしたって俺に勝つこともできないのにさ。

朝には女神のように優しくあった顔が、今は怖い女の地獄の神のようだ。

だけど、俺が女の手から刀を取るの簡単さ。あつと言う間に左の手で女の両方の手を押えてしまった。俺の手を離そうと動けば動くほど、女は自分の手や肩が痛くなるんだ。それで今度は大きな声で何か叫んでいたんだが、気にもならなかった。

そうしてついに侍の見ている前で女を自分のものにしたんだ。侍は木

女がそう言つて侍は、

『そうしなさい。ここで待つていなさい。できるだけ早く戻るから。』と言
うんだ。俺もその方がいいから黙つていた。

侍は女をこんな所に一人で残して危なくないのか、なんて考えてもい
ないようだった。どんどん進んで行こうとするんだ。

ここは俺の庭のような所だ。侍はもう俺にとって捕まえた手の中の鳥の
ようなものだ。二、三十分も歩くと、竹が少なくなつて背の低い木や草の所
に出た。

侍はまだなのかと聞くようにこちらを見た。

俺は『そうです、もうすぐです。あの杉の木の下あたりです。お墓がある

のはあそこです。』と言つと、侍は走つて杉の木の下へ行つた。『墓はじこ

なんだ。』と見回して俺のことを注意していない。

俺は侍の後から近づいて、両方の腕を

捕まえた。侍は急い後ろから抑えられて

腕を取られたので、何もできない。

あつと言つ間もなく杉の木に侍の

体を縛り付けてしまった。

俺は泥棒だからいつてもこの紐を

けれど、気にもしないで進んだ。

だけど、あの場所まで来て

自分の夫が杉の木に

縛られているのを見て、

すぐに何があつたのか

分かつたんだろ。女神だつた

はずの女は胸の所に

隠していた小さい刀を出して、俺の方に向かつてきた。

俺は簡単に横に逃げたんだけど、女は



なんだって嘘をついたんだ。』と叫んだ。

俺は『どうしてだつて。すぐにわかるさ。ちよつと待つてゐる。』と言いな
がら、大声が出せないように侍の口に木の葉をいっぱい押し込んだ。こん
な林の奥でも誰かが近くを通ることもあるからな。」

「そうやって、俺は女の所へ戻つて言つた

『御主人が急におなかが痛くなつて苦しんでいる。歩く事もできないよう
だから来て見てあげてくださいよ。急いで、急いで、こっちですよ。』

女は暗い林の中を一生懸命走つて俺について来た。俺が泥棒だなんて
全然思つてもいないようだ。何回も転んだり、木の枝が顔に当たつたりした

持つてゐるんだ。金持の家に入る時

高い壁を登らなければならないし、

家の中で高そうなものを探したり、

盗んだりする間、家族の者達を

縛らなければならないこともある。

大きな物を盗む時には

運び出すのに紐が役に立つしな。

侍は、突然縛られて何がなんだか分からない。

『どうしてだ、どうしてこんなことをするんだ。嘘をついたのか。なぜ、

